

日本は幕末から明治にかけて政治的に大転換を遂げたが、それとともに社会的・文化的にも「西洋」への志向が強まり、その結果所謂「近代化」を成し遂げたことは周知の通りである。一方、明治新体制に於いて、伝統的な「漢学」が一定の役割を果たしたこともまた事実である。

江戸の儒学者は、経書等儒学の文献に基づきその精髓を極め、それを古典漢文（及び和語）に於いて著述、門下生を教育し、且つ藩政等現実社会での有為な活動を行なおうとしており、その点では中国の士大夫と基本的姿勢は共通する。しかし、当然ながらそこには江戸社会の特殊性、幕末・明治期の時代性等、中国とは異なる状況があり、従って学問に於ける特定の経書への志向性・偏向性やその解釈の傾向に日本儒学の独自性が見て取れる。つまり、日本の幕末・明治期という時空に於ける学術の在り方の特殊性を明確にするためには、彼ら漢学の担い手たちが参照し依拠していると自認してきた中国学の方法論から、改めて彼らの学術を照射することに意味があると思われる。そして、そこには封建社会（江戸）と近代社会（明治）という対立する状況に於いて「漢学」がどのような断絶と連続性を示しているかという思想史的問題も含まれる。

そこで、幕末に松山藩に仕え藩校会頭となり、また昌平黉でも学んだ朱子・陽明兼学の儒学者でありつつ、維新後は裁判官として「実学」に従事し、晩年は東宮御用掛となり、また天皇に進講するなど皇室との関係を深めた、転換期の「漢学者」三島中洲の学術を取り上げ、その特質の一端を論ずる。

日本從幕末到明治期間完成了政治上巨大的轉變，同時，在社會、文化上追求「西洋」的風氣也更加強盛。最終便成功的完成了「近代化」這個眾所皆知的結果。

江戶時代的儒學家以經書等儒學著作為基礎、汲取其精髓，在學問上精益求精，並且將之寫成古典漢文(以及和文)方面的著作、教授其門下弟子、並且企圖在藩政體制的社會現況之下有所作為。在這一點上，和中國的士大夫的基本姿態是有共通性的。然而，想當然耳因為有著江戶時代的特殊性、幕末・明治時期的時代性等和中國大不相同的情況，於是在學問上對特定經書的選擇和偏好，以及其解釋的偏向都能夠窺探出日本儒學的獨特性。

也就是說，如果想要明確的指出在日本幕末・明治時期的時空當中，學術所存在的意義及其特殊之處的話，必定要從這些獨挑日本漢學大樑的學者們所參照以及作為根據的中國學之方法論著手才行。如此，重新對照性的探討這些大師的學術成果始有其意義。另外，其中也包含了在封建社會(江戶)和近代社會(明治)這種對立的狀況之中，「漢學」究竟顯現出了什麼樣的斷層和連續性這樣的思想史性問題。

在幕末時期被任命為松山藩藩校校長，同時也在平饗門門下學習朱子・陽明兼學的儒學家三島中洲，在維新後以法官的身分施行「實學」，晚年更成為東宮御用掛，負責為天皇授課等事宜，和皇室關係緊密。本稿以處於時代轉換期的「漢學者」三島中洲為中心，試論述及探討其特質。

I 三島中洲「泰卦講義」〔中洲文稿・第二集・卷之三・下篇〕

1. 「泰卦講義」

明治三十二年（一八九九年）一月七日天皇皇后出御於鳳凰殿、聽講。臣毅進講周易泰卦、退錄之。

䷊泰。小往大來、吉亨。

泰、通也、安也。小謂陰、大謂陽。三陰往于外、三陽來于內、陰陽往來相通。故名曰泰。凡陰陽之氣、往來相通、則天地安。上下之情、往來相通、則國家安。又小爲小人、大爲大人。大人來于內、小人往于外、亦天下泰平象。故占得此卦者、莫不吉而亨也。

以我朝言之、神武天皇以來、列聖治世、及陛下明治之治安是也。以漢土言之、堯舜以後明君治安之世亦是也。

A 三島中洲『周易私録』（未刊）卷之五

泰象辭／事證

我朝神武天皇以下、明君治世、漢土堯舜以下、明君治世、皆當此。

① 程頤『程氏易傳』

小謂陰、大謂陽。往、往之於外也。來、來居於內也。陽氣下降、陰氣上交也。陰陽和暢則萬物生、遂天地之泰也。以人事言之、大則君上、小則臣下、君推誠以任下、臣盡誠以事君、上下之志通、朝廷之泰也。陽爲君子、陰爲小人、君子來處於內、小人往處於外、是君子得位、小人在下、天下之泰也。泰之道、吉而且亨也、不云元吉、元亨者、時有汚隆、治有大小、雖泰、豈一槩哉。言吉、亨則可包矣。

② 朱熹『周易本義』

泰、通也。爲卦天地交而二氣通、故爲泰。正月之卦也。小謂陰。大謂陽。言坤往居外、乾來居內。又自歸妹來、則六往居四、九來居三也。占者有陽剛之德、則吉而亨矣。

2. 「泰卦講義」

初九。拔茅茹、以其彙、征吉。

初九變巽爲升、巽柔白。又爲陰木。有茅象。茹、根之相牽連者。彙、類也。一陽始進、二陽牽連來、爲拔茅其根以類進之象。征、行也。謂大而軍行、小而旅行、皆吉。蓋喻一君子進、朋類相牽連而起、征行必吉。

如我朝後醍醐天皇擢一楠正成、而新田兒島菊池〔名〕和諸忠臣並起、成中興之業。及漢土唐堯舉一舜、而八元八愷並進、成雍熙之化、當之。

B 『周易私錄』

初九／註釋

何楷曰、變巽爲升、巽柔白。又爲陰木、故象茅。大過初六籍用白茅、是也。○來瞿唐曰、初在下、茹之象。

事證

後醍醐天皇用一楠正成、而新田・兒島・菊池・名和等諸忠臣並起、成中興之業、是也。○楊誠齋曰、堯舉一舜、乃得十六舜、舜舉一禹、乃得九禹、吉孰大焉。

③ 何楷『古周易訂詁』卷二「初九…征吉」注

變巽爲升、巽柔白。又爲陰木、故象茅。大過初六籍用白茅、是也。茹、根之相牽連者。

④ 來知德『周易集註』

變巽爲陰木、草茅之象也。茹者根也。初在下、根之象也。彙者類也。

⑤ 『春秋左氏傳』「文公十八年」

昔高陽氏有才子八人。蒼舒、隤戡、檇戡、大臨、扈降、庭堅、仲容、叔達、齊、聖、廣、淵、明、允、篤、誠、天下之民謂之八愷。高辛氏有才子八人。伯翳、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季狸、忠、肅、共、懿、宣、慈、惠、和、天下之民謂之八元。此十六族也、世濟其美、不隕其名。以至於堯、堯不能舉。舜臣堯、舉八愷、使主后土、以揆百事、莫不時序、地平天成。舉八元、使布五教于四方、父義、母慈、兄友、弟共、子孝、內平外成。

⑥ 楊萬里『誠齋易傳』

一茅拔、眾根隨、一賢舉、眾俊歸。泰之初、惟一陽首進、則三陽類進矣。欲退群小、固非一君子之力、欲進群賢、固不可无一君子之力。堯舉一舜、乃得十六舜、舜舉一禹、乃得九禹、吉孰大焉。君子之志在天下、不在一身、故曰志在外也。

3. 「泰卦講義」

九二、包荒、用馮河。不遐遺、朋亡。得尚于中行。

九二變離。離虛而容、有包義。荒、虛也、指五陰。二應五、爲包荒象。謂奉翼其君也。馮、古文淵。淵、無舟渡河也。九二變柔互坎、故象河。奉翼其君、用馮河之勇、可謂忠勇。遐、遠也。三陰在外、九三一陽隔之、有遐遠之象。朋、近鄰私黨也、指初與三。不遺遐遠、亡私朋、公平之至、且以陽剛得中。蓋忠勇奉上、公平接下、中行之君子也。尚卑配尊之名、如尚主之尚、占者有此中行之德、則得尚于六五中行之君。而泰平之功以成矣。雖居臣位、所以爲泰之主也。

如我朝紀武內之於神功皇后、藤原鎌足之於天智天皇、及漢土虞舜之於唐堯、伊尹之於湯、周公之於成王、皆是已。

C 『周易私錄』(九二／註釋)

何楷曰、此爻變離。離虛而容者也。亦有包義。○翟元曰、荒、虛也。二五相應、五虛无陽、二上包之。○何楷曰、徒涉曰馮、九二變柔、互坎、故象河。五居坎外、與二隔河、二若馮河而往、則能

就乎五矣。乾健利涉瀕之象也。以二居柔位、故教之以勇。三陰在外、九三一陽隔之、有遐遠之象。朋謂初三也。同類爲朋、九二以乾德居、剛而能柔、蓋博大明決至公无我之士也。其志在用我之實、包五之虛、以成上下交之泰。徒步涉河、无所疑忌、將以就五、不以陰之我遐而遺、不以陽之我朋而比之、渾乎大中、而無所倚、斯故得尚于六五之中行、尚配之在己上者、如漢世尚主之尚、正與歸妹相應、五居上卦之中、故曰中行。○段玉裁曰、說文、溯無舟渡河、溯瀕音近。○按九剛相濟、居上不偏不倚、即全德名臣。

⑦ 李鼎祚『周易集解』

翟玄曰、荒、虛也。二五相應、五虛无陽、二上包之。

⑧ 段玉裁『說文解字注』十一篇·上二「溯」

溯、無舟渡河也。〔注〕『小雅』「傳」曰、「徒涉曰瀕河、徒搏曰暴虎。」『爾雅』「釋訓」、「論語」「孔注」同。溯、正字、瀕、假借字。

4. 「泰卦講義」

九三、無平不陂、無往不復、艱貞無咎。勿恤其孚、于食有福。

陽奇畫橫互象平、變陰偶畫缺陷象陂。陂、險也。往則彖辭小往之往、復返而之內也。陽實爲信孚象。二三四互兌、爲口食之象。蓋平者必陂、往者必復、物理循環自然之數。三居泰之中、不可無此豫戒。

如我朝後醍醐天皇建武之末、彼唐玄宗天寶之初、占者戒于此。艱危其思慮、貞固其施爲、則無咎過。且不用憂恤、人民信孚、有玉食之福。設使後醍醐天皇・玄宗用萬里小路藤房・張九齡等艱貞之戒、則永受玉食之福。免板蕩蒙塵之禍。九三一過之、則六四上六之禍相繼至、必然之勢也。故艱貞二字、泰卦豫戒之眼目、不可輕輕讀過。

D 『周易私錄』（九三／註釋）

按古易本陂作頗、可從。○何楷曰、陽奇畫橫互象平、變陰偶畫缺陷象陂。往即彖辭小往之往、…

⑨ 何楷『古周易訂詁』

陽奇畫橫互、象平、變陰偶畫缺陷、象陂。又虞翻以天地分爲平、亦通。往即彖辭小往之往、復返而之內也。…二三四互兌、爲口食之象。

*『周易』「說卦傳」曰、兌爲口。…爲口舌。

⑩ 『程氏易傳』

三居泰之中、在諸陽之上、泰之盛也。物理如循環、在下者必升、居上者必降。泰久而必否、故於泰之盛、與陽之將進、而爲之戒曰、无常安平而不險陂者、謂无常泰也。无常往而不返者、謂陰當復也。平者陂、往者復、則爲否矣。當知天理之必然。方泰之時、不敢安逸、常艱危其思慮、正固其施爲、如是則可以无咎。

⑩ 『誠齋易傳』

平與陂相推、往與復相移。居泰之世者、勿謂時平、其險將萌。勿謂陰往、其復反掌。九三陽盛極矣、陰將復、泰將否矣、可不懼乎。君臣克艱而守正、庶乎其无咎。…開元之末、天寶之初、其泰之九三乎。

5. 「泰卦講義」(附論)

余常謂、上古蒙昧、人妄信鬼神。故聖人神道以設教、使民因占筮問鬼神、避凶就吉。吉皆由得道而生、凶皆由失道而生。且吉卦說保吉之道、凶卦說去凶之道。吉凶皆寓道理。蓋聖人教人之方便也。後世人智開明、自知道理。雖知鬼神可敬、而不復妄信之。占筮問鬼神之事殆廢絕。然玩味卦爻造設之意、錯綜德位時三者。有德無位時則不可、有位無德時則不可、有時無德位則不可。必備三者、而後中其宜。應人事萬變、得時中之道、莫善焉、則易之書終不可廢。仲尼所以五十學易也。故余平生講易、引古今事蹟證之。六十四卦、三百八十四爻、皆處事變之道也。自此類推比附、千變萬化、不可窮極。曾欲著周易事證一書、而未遑。今辱遇經筵開講、述而論一斑、以達聖聽、不堪感恩之至。

II 三島中洲「大學絜矩章講義」〔中洲文稿・第二集・卷之三・下篇〕

大學絜矩章講義^{第一}

- ① 欲講本章、不可不先講『大學』大意。大學者、古帝王治國平天下之大學問、而其本出『堯典』、敷演敘述、以作此書也。何者、『堯典』曰「欽明」、蓋慎獨而明理、其意必誠。是『大學』「誠意」之所出也。曰「文思安安」、蓋思合文理、而從容安易、其心必正、是「正心」之所出也。曰「允恭克讓」、蓋恭儉退讓、則視聽言動皆合禮、而其身必修、是「修身」之所出也。曰「光被四表、格于上下」、是「明明德於天下」也。「親九族」、是「齊家」也。「平章百姓」、是「治國」也。「協和萬邦」、是「平天下」也。是故所謂六條目、皆本『堯典』、而無所特發。但本章說絜矩工夫、是『大學』特色、而『堯典』所不言也。且夫絜矩即孔子所謂忠恕、而忠恕之外、無孔子之道、忠恕以成德、謂之人而已矣。則此書之成于孔門諸子之手、萬無可疑。而絜矩二字、實爲帝王治國平天下之大眼目。是臣今日所以講本章也。

- ② 故欲正其心者先誠其意ナリ、是亦明德ヲ明ラカニスル工夫ノ一ナリ、以上(=誠其意)ヲ第六條目トス、此四ヨリ六マデノ三條目(=修其身・正其心・誠其意)ハ、前段ノ第一綱領タル明明德工夫ヲ分析シテ解釋シタルモノナリ、…

蓋シ物ヲ格スコトカ出來タレハ、知モ致セルナリ、知カ致セレハ、意モ善意ノミニテ、自然ト誠ニナルナリ、故ニ王子ハ到知格物ヲ誠意中ノ工夫トシテ、條目ニ列セス、其證據ニハ到知格物ノ傳ハナクシテ、誠意ヨリ初メテ傳アリ、

西洋心理学ノ說ニ、心ハ情意知ノ三箇ニテ組織スト云ヘリ、情ハ即チ正心ノ心ナリ、意ハ誠意ノ意ナリ、知ハ良知ノ知ナリ、大學所謂ノ外ニ出デス、且ツ三箇ノ組織ノ研究シ得ル迄ニテ止リ、之ヲ治ル工夫ナシ、我大學ニハ心情ニハ正ノ工夫、意ニハ誠ノ工夫、知ニハ致ノ工夫アリテ、之ヲ治ムルヲ以テ目的トス、是我漢學ノ實行ニ益アル所以ナリ、

(三島中洲講述「古本大學講義」(『大學講義』益友社))

②所謂平天下在治其國者、上老老、而民興孝。上長長、而民興弟。上恤孤、而民不倍。是以君子有絜矩之道也。

本章主意、言治國平天下之要、在用絜矩之道、以用人理財。而此第一節、猶承上章齊家之意、言自家及國、上下感應之理、以起下節絜矩工夫。蓋言第一章所謂平天下在治國者、如下文所述、而物必有先後順序。欲平天下、則先治國、欲治其國、則先齊其家。故爲上者、先老其老、長其長、恤其孤。一家齊、而下民感應興起。修孝弟、不倍棄孤弱。國自治、是何以能然。人雖有上下貴賤之別、而心則同一、如合符節。故感應之速如此耳。是以有位有德之君子治國、必有絜矩之道。絜、挈也。矩、所以爲方也。以我心度民心、如挈矩度物也。

*鄭玄注「絜、猶結也、挈也。矩、法也。」

② …挈ハ度ナリ、彼此ヲハカリツモルヲ云、矩ハサシガ子ニテ、四角ニスル道具、故ニ挈矩ハ我ガ心ヲ以テ人ノ心ヲ度リ、各人ノ心ノ欲スル所ヲ得サシメ、上下四方皆均シク矩ノ如ク、眞四角ニスルコトヲ云、即チ前文ニアル忠恕ノコトナレドモ、言ヲ變シテ悟リヤスカラシムルノミ、蓋シ上老老以下三句ノ如ク、下民カ上ニ感發興起スル所ヲ見レハ、上下君民トモニ、心ハ同シモノナリ、故ニ君子ハ我カ心ヲ以テ、人ノ心ヲ度リテ、寸尺ノ違ハヌコトヲ知り、挈矩ノ道ヲ用キ天下ヲ平ニスルナリ、
[「古本大學講義」]

*朱熹注「絜、度也。矩、所以爲方也。」

③所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右。此之謂絜矩之道。

第二節、釋絜矩之義。蓋言上下前後左右、人心皆同。己所惡、人亦惡之。己所好、人亦好之。故挈己心、度人心。己所惡、勿施於人、己所好、施於人、則上下前後左右之人、皆得其分願、與己心均一方正如矩、此之謂絜矩之道。

孔子自釋忠恕曰、「己所不欲、勿施於人」、此節所謂六箇所惡、即己所不欲也。勿使勿事勿先勿從勿交、即勿施於人也。蓋異詞同旨耳。且夫人心自有天理。但凡人爲私欲所蔽、其行爲不能無陷非理。然人以非理加己、則私欲已無所蔽。能知其爲非理、惡之不欲之。蓋我心天理照之也。則知人心之同、即天理之同也。

此下至章末、皆絜矩之道。而就用人理財上說之。蓋治國平天下、莫大於此二事。能用此道於用人、則其人忠君愛國、出於君民之所同好。是度君民之心矩之也。用此道於理財、則出納公平、而君民共利。是亦度君民之心矩之也。於是君民各得所願、而國治天下平矣。雖然是非明君賢相則不能焉。後世人君之用人、偏己所好、而不顧民之好惡、其理財、專圖己利、而不顧民之利害。於是下民皆失分願、而心不服。民心不服、而能治國平天下者、未之有也。是以近世西洋諸國制法律、決於衆論以用人。開國會以議理財。蓋欲得不偏於君不偏於民、上下公平之治也。然則今日國會、即大學絜矩之器機也。雖然既爲器機、形迹一定、不可復移。小人或不知制作本意。挾私心用之、則利器反爲大害。譬之護身誅賊之銃劍、亦可以殺身害善人矣。是故君子必修誠正修齊之學、以臨國天下。其心正大公明、雖無器機、亦能得行絜矩之道、況於有器機乎。

③詩云、「樂只君子、民之父母。」民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母。

…民ノ所好トハ、善政恩惠ヲ云、民ノ所惡トハ、苛政重賦ヲ云、近來西洋ニ國會ヲ開キ、公議

輿論ヲ容レテ、國政ヲ爲スモ亦民心ヲ以テ己心トスルノミ、制度ハ古今ノ別アレドモ、道理ニ古今ノ別ナキコト、知ル可シ、

〔「古本大學講義」〕

- ④ 是故財聚則民散、財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。

我言カ理ニ悖リ逆フテ、口ヨリ出ツレハ、人ノ言モ理ニ悖リ逆フテ、我耳ニ入り來ル、此ト同一理ニテ、貨カ理ニ悖リテ我ニ入レハ、其貨モ亦理ニ悖リテ出ツ、蓋シ上下^{こども}交^{こども}利ヲ取り、國土財用ヲ失フニ至ルヲ云フ、…蓋シ人間ノ事、義ト利トニツアルノミ、有德者ハ義に由リ利ヲ用ユ、故ニ能ク財ヲ散シテ民ヲ聚ム、民聚マレハ終ニ己レノ大利トナル、無德者ハ義ニ背キ利ヲ取ル、故ニ專ラ財ヲ聚ム、財聚ムルノ極ハ民散シ利モ亦奪取ラルハニ至ル可シ、

〔「古本大學講義」〕

- ⑤ 此章ノ主意ハ、治國平天下ノ肝要ハ、用心治財ノ二事ニ絜矩ノ道ヲ用キルニ在リト云フニ過キス、然ルニ國天下ノ政事ハ、紛ニ多端ナリ、此二事ニテハ、盡サハルニ似タレドモ、古聖賢ノ言簡ニシテ盡セリ、何トナレバ、仁政ノ目的ハ國財ヲ善ク治メ、萬民ヲ生養スルニ在ルノミ、而シテ其政ヲ爲スモノハ、賢人ニ非サレハ能ハス、故ニ用人ト治財トノ二事ニ、絜矩ノ道ヲ用キレハ、國治リ天下平カナルナリ、

大學ノ末ニ、絜矩ヲ點出シタルハ、經首ノ明明德ト、起結照應セリ、何トナレハ明德ハ天地萬物ニ通明シテ同體ナル大德ナリ、然ルニ私意ニ蔽遮セラレテ、我ト天地萬物ト間隔シ、異體トナリ居ルモノヲ、私意ヲ去リ、原ノ明德ニ復シ、天地萬物ト同體ニナリ、彼此通明スルヲ、明德ヲ明ニスト云フ、然ルニ此間隔ノ私意ヲ去ル工夫ハ、唯忠恕アルノミ、故ニ孔子ハ吾道一以貫之ト云ハレ、曾子其語ヲ釋シテ、夫子ノ道ハ忠恕ノミト云ハレシ所以ナリ、而シテ大學ノ絜矩ハ、即チ忠恕ニ非スヤ、然レハ大學明明德ノ實落工夫ハ、絜矩ノ二字ニ在リ、前後文意文理共ニ一貫ス、首尾完全ノ書ト謂ベシ、

〔「古本大學講義」〕

1. 三島中洲：略歴

三島中洲（1830〔天保元〕～1919〔大正8〕）

幕末～大正期の儒学者・教育者。名は毅、字は遠叔、通称は広次郎・貞一郎、中洲はその号。備中国窪屋郡中島村（現倉敷市中島）の庄屋の子。14歳で山田方谷に入門する。1857年（安政4）備中国松山藩に出仕した。翌年、江戸に出て昌平黌に学び、59年松山藩校有終館の会頭となった。藩政にも参与し、維新前後には朝敵となった藩の存続のために尽力した。72年（明治5）司法省に出仕し、裁判所長・判事を歴任し、ボアソナードから民法・自然法の講義をうけた。77年には漢学塾二松學舎を創設した。81年東京大学古典科教授、85年東京学士院会員となった。幕末の政治にかかわった経験から、陽明学の理気一元論にもとづき、慈愛心や利欲を否定しない「義利合一」論を唱え、明治以後は西洋の富強と君臣道德との「合一」を主張した。著書は「中洲講話」「中洲文稿」など。

〔石毛忠等編『日本思想史辞典』山川出版社、2009〕

2. 三島中洲による進講 〔町泉寿郎『三島中洲と近代―其の一―』による〕

明治 32 年 (1899)	『周易』(泰卦) [→資料 I]
明治 33 年 (1900)	『大学』(絜矩章) [→資料 II]
明治 34 年 (1901)	『書経』(大禹謨) *天皇風邪のため中止
明治 35 年 (1902)	『書経』(大禹謨)
明治 39 年 (1906)	『詩経』(大雅・蕩什・江漢篇)
明治 43 年 (1910)	『論語』(泰伯篇・末章)
明治 44 年 (1911)	『周易』(大有卦)
大正 3 年 (1914)	『書経』(周書・無逸)

3. 参考文献

- ・山田琢・石川梅次郎『山田方谷・三島中洲』（叢書・日本の思想家 41） 明德出版社 1977
 - ・三島正明『最後の儒者―三島中洲―』 明德出版社 1998
 - ・戸川芳郎編『三島中洲の学芸とその生涯』 雄山閣出版社 1999
 - ・松川健二『山田方谷から三島中洲へ』 明德出版社 2008
 - ・大学展示資料室運営委員会『三島中洲と近代―其の一―』 二松學舎大学附属図書館 2013（非売品）
- *同名の企画展の展示図録。解説・翻印・訓読は二松學舎大学准教授町泉寿郎が担当。